

書評 物語ウクライナの歴史

—ヨーロッパ最後の大国—

小林寿太郎

本書の著者はウクライナ大使などを勤めた職業外交官である黒川祐次さんである。スラブ世界の専門家ではないが、ウクライナの歴史、地理、社会について総合的な内容となっており、ウクライナに好意的な視点もあるが、全体として客観的な記述となっている。私は以前からスラブ世界に関心を持っていたが本書で初めて知ることも多かった。

例えばロシア帝国のピョートル大帝がスウェーデンと戦った北方戦争であるが、ロシアがバルト海地方の覇権を確立した出来事としてだけ理解していた。しかしこの戦争はウクライナにとっても歴史のターニングポイントであった。つまり当時のウクライナの指導者がスウェーデン側についた結果、ウクライナはロシアから独立する機会を失ってしまったことがわかった。

本書は20年前に出版されたため、それ以降の出来事は記述されていない。著者はウクライナの将来について明るい楽観的な見通しである。その根拠として、日本全土に匹敵する耕地面積を源泉とする巨大な農業生産力、5000万人にのぼる国民の教育水準の高さ、穏健で協調的な外交方針などを挙げている。

しかしながら外交についてはあまり成功しているようには思えない。ウクライナは2003年に開始された大義なきイラク戦争に、NATO加盟に寄与するという判断から米国ブッシュ政権からの要請に

応えてイラクに派兵している。1650名の人数は派兵38ヶ国のなかでもトップクラスである。イラクが大量破壊兵器を隠しているという虚偽の口実で開始された戦争に、ウクライナはブッシュの忠臣として大兵力を派遣した。

この戦争で数十万人とされるイラク人が殺されたが、ウクライナ軍の損害も多かった。派遣された第5独立自動車化旅団は2003年8月から、イラク中南部のクートに駐屯した。それ以降、市民のデモとの衝突、武装勢力からの爆弾攻撃などで18名が死亡した。おなじみの青と黄色のウクライナ国旗に包まれた棺が米軍輸送機でキエフに無言の凱旋をするたびに撤退を要求する世論が高まり、2005年12月によりやく撤退が完了した。

プーチンによるウクライナ侵攻もウクライナがNATO加盟に固執したことが原因のひとつとされている。NATO加盟という外交方針がウクライナ国民に何回も災厄をもたらしたと思う。(黒川祐次著 中公新書 946円税込)